全学教育科目に係る授業アンケートにおける
エクセレント・ティーチャーズ
（平成29年度）

高等教育推進機構では平成２４年度から，全学教育科目に係る授業アンケート結果において，総合評点の値が上位となった専任教員のうちから次項選定基準に基づき，「全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ」として選定し，所属・職名・氏名・担当授業科目・総合評点をホームページで公表することとしている。
また，エクセレント・ティーチャーズのうち，各授業科目区分の最上位者から，当該授業科目の目的・内容・実効上の取組・工夫等について報告を得て紹介する。

教員から報告された授業への取組・工夫等については，学生へのフィードバックを目的として，また，教員のＦＤや教員相互の授業参照資料として公表する。
なお，平成２３年度まで評価室が実施してきた授業アンケート結果の公表に至る検討の経緯や公表方法に関する考え方等は，平成１５年度年次報告書（第１部第２章『学生による「授業アンケート」について』）や同別冊「学生による授業アンケート結果」（PDF）を参照願いたい。

なお，授業アンケートは学生の視点からの評価であり，この指標のみが授業の質や教員の教育能力を示すものではないことを付言しておきたい。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーの選定基準

１．対象者

対象年度に開講した全学教育科目において，学生による授業アンケートを実施した授業科目を担当する本学の教員（非常勤講師を除く）とする。

ただし，アンケート提出者が９名以下の授業科目を担当する者は除く。

２．選定方法

学生による授業アンケート結果において，文系・理系区分及び授業科目区分ごとに総合評価の値が上位の者から，原則，別表①の選出数に基づき全学教育科目におけるエクセレント・ティーチャーズとして選定する。ただし，総合評点（主要設問の評定値の平均）の値が 4.00 未満の者は除く。

なお，文系・理系区分は，担当教員の所属部局により別表②の「文系・理系区分」に基づき区分することとし，授業科目区分は，国立大学法人北海道大学全学教育科目規程（平成７年４月１日海大達第２号）第２条に規定する科目により区分することとする。

【別表①：選出数】

		一般教育演習	総合科目	主題別科目	共通科目	外国語科目	外国語演習	基礎科目	日本語科目
文系	15	2	1	4	1	4	2	1	
理系	15	4	1	1	1	2		6	

【別表②：文系・理系区分】

〈文系部局〉

文学研究科	スラブ・ユーラシア研究センター	国際連携研究教育局
法学研究科	観光学高等研究センター	産学・地域協働推進機構
教育学研究院	アイヌ・先住民研究センター	高等教育推進機構
メディア・コミュニケーション研究院	社会科学実験研究センター	国際連携機構
経済学研究院	大学文書館	人材育成本部
公共政策学連携研究部	埋蔵文化財調査センター	安全衛生本部

〈理系部局〉

情報科学研究科	歯学研究院	総合博物館
水産科学研究院	獣医学研究院	北方生物圏フィールド科学センター
地球環境科学研究院	北海道大学病院	人獣共通感染症リサーチセンター
理学研究院	低温科学研究所	環境健康科学研究教育センター
薬学研究院	電子科学研究所	北極域研究センター
農学研究院	遺伝子病制御研究所	サステイナビリティ学教育研究センター
先端生命科学研究院	触媒科学研究所	保健センター
保健科学研究院	情報基盤センター	創成研究機構
工学研究院	アイソトープ総合センター	
医学研究院	量子集積エレクトロニクス研究センター	

３．その他

（１）上記２のエクセレント・ティーチャーズのうち，各授業科目区分の最上位者から，当該授業科目の目的・内容，実行上の取組・工夫等についての報告を得て紹介する。ただし，過去３年間に紹介したエクセレント・ティーチャー※は除く。

（２）一人の教員が複数の授業科目区分で最上位となった場合は，全ての授業科目について報告を得て紹介する。ただし，対象者の希望により，報告・紹介する授業科目をいずれか一つのみとすることができる。

（３）上記（１），（２）のただし書きに該当する場合，及び退職等で報告を得られない場合は，次点のエクセレント・ティーチャーから報告を得て紹介する。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ（平成２９年度）

区分内順位	文系理系	授業科目区分	総合評点	部局名	職名	氏名	授業形態	必修選択	授業科目名	講義題目名	提出枚数
1	文系	一般教育演習	4.95	国際連携機構	准教	山田　智久	演習	選択	フレッシュマンセミナー	アカデミック・プレゼンテーション	19
1	文系	一般教育演習	4.95	国際連携機構	准教	山田　智久	演習	選択	フレッシュマンセミナー	日本社会から見るグローバル課題	12
3	理系	一般教育演習	4.92	歯学研究院	准教	髙橋　茂	演習	選択	フレッシュマンセミナー	唾液のサイエンス～知られざるその能力	16
4	理系	一般教育演習	4.87	遺伝子病制御研究所	教授	髙岡　晃教	演習	選択	フレッシュマンセミナー	ミクロの世界を探る人体のしくみと病気	18
5	理系	一般教育演習	4.83	工学研究院	准教	岸　邦宏	演習	選択	フレッシュマンセミナー	新都市構想～都市の未来を考える～	23
6	理系	一般教育演習	4.78	水産科学研究院	教授	和田　哲	講義	選択	フレッシュマンセミナー	動物社会の科学	23
1	文系	総合科目	4.63	高等教育推進機構	准教	伊藤　康弘	講義	選択	健康と社会	キャンパス・アクセシビリティ入門	42
2	理系	総合科目	4.49	保健科学研究院	教授	結城　美智子	講義	選択	健康と社会	高齢者と健康	31
1	文系	主題別科目	4.77	教育研究院	准教	近藤　健一郎	演習	選択	歴史の視座	北海道大学の歴史	18
1	文系	主題別科目	4.77	文学研究科	准教	今井　順	講義	選択	社会の認識	社会学と批判的思考	19
3	理系	主題別科目	4.76	理学研究院	准教	川本　思心	演習	選択	科学・技術の世界	北海道大学の「今」を知る	28
4	文系	主題別科目	4.75	文学研究科	教授	ゆはず　和順	講義	選択	芸術と文学	漢文学入門	26
5	文系	主題別科目	4.74	経済学研究院	教授	谷口　勇仁	講義	選択	社会の認識	考える経営学	36
5	文系	主題別科目	4.74	法学研究科	助教	津田　智成	講義	選択	社会の認識	行政法入門	17
1	文系	共通科目	4.44	経済学研究院	教授	髙木　真吾	講義	選択	統計学		39
2	理系	共通科目	4.31	情報基盤センター	教授	水田　正弘	講義	選択	統計学		78
1	文系	外国語科目	4.75	メディア・コミュニケーション研究院	准教	金　ソンミン	講義	必修	韓国語Ⅱ		23
2	文系	外国語科目	4.73	メディア・コミュニケーション研究院	助教	張　ジュヒョク	講義	必修	英語Ⅳ	中級	40
2	文系	外国語科目	4.73	メディア・コミュニケーション研究院	准教	PIERS　WILLIAMSON	講義	必修	英語Ⅰ		30
4	文系	外国語科目	4.64	メディア・コミュニケーション研究院	准教	金　ソンミン	講義	必修	韓国語Ⅰ		23
4	文系	外国語科目	4.64	メディア・コミュニケーション研究院	准教	PIERS　WILLIAMSON	講義	必修	英語Ⅰ		36
4	文系	外国語科目	4.64	メディア・コミュニケーション研究院	准教	増田　哲子	講義	必修	スペイン語Ⅰ		40
1	文系	外国語演習	4.85	メディア・コミュニケーション研究院	教授	ASSMANN　STEPHANIE	演習	選択	ドイツ語演習	基礎：留学生から見たドイツ	19
2	理系	外国語演習	4.77	水産科学研究院	准教	バウア・ジョン・リチャード	演習	選択	英語演習	中級：Introduction to Marine Science	16
3	文系	外国語演習	4.73	メディア・コミュニケーション研究院	教授	橋本　聡	演習	選択	外国語特別演習	チェコ語入門：話してみようチェコ語	15
4	理系	外国語演習	4.66	理学研究院	教授	松王　政浩	演習	選択	英語演習	中級：科学ジャーナリズムの英語	17
1	理系	基礎科目	4.79	国際連携機構	准教	中村　重穂	講義	必修	日本語Ⅰ		12
2	理系	基礎科目	4.59	地球環境科学研究院	教授	大原　雅	講義	必修	生物学Ⅱ		57
3	理系	基礎科目	4.52	理学研究院	准教	澁川　陽一	講義	必修	線形代数学Ⅱ		29
4	理系	基礎科目	4.5	理学研究院	准教	和多　和宏	講義	必修	生物学Ⅱ		62
5	理系	基礎科目	4.48	獣医学研究院	講師	岡松　優子	講義	必修	生物学Ⅱ		33
6	文系	基礎科目	4.45	理学研究院	准教	長谷部　高広	講義	必修	微分積分学Ⅱ		10
7	理系	基礎科目	4.44	工学研究院	准教	猪熊　泰英	講義	必修	化学Ⅱ		43

：今年度の「授業内容・工夫等」執筆依頼者

◎授業科目区分毎の授業アンケート実施者数（延べ）

一般教育演習	118 名
総合科目	49 名
主題別科目	106 名
共通科目	20 名
外国語科目	62 名
外国語演習	130 名
基礎科目	204 名
日本語科目及び日本事情に関する科目	5 名
計	694 名

一般教育演習(フレッシュマンセミナー)

「アカデミック・プレゼンテーション」

国際連携機構　准教授　山田　智久

■シラバス

授業の目標　Course Objectives

この授業は留学生と日本人学生の協同作業を通し、1）調査方法、2） 協同作業での役割の認識、3） 異文化理解について学ぶことを狙いとする授業である。

到達目標　Course Goals

（1）調査項目に対し、的確な調査方法を適用できる。
（2）グループ内で自身の役割を見つけ、それを遂行できる。
（3）異なる考え方への理解を深める。
（4）タイムマネージメントができるようになる。

授業計画　Course Schedule

この授業は、個人、グループでの予習を基に、グループディスカッションへとつなげ、調査項目の理解を深めます。授業は、大きく分けて次の 2 つのパートに分かれます。

（1）自分の立場（反対／賛成）を明確にした発表
（2）ケースメソッドを用いた発表

上の 2 つの作業を留学生と日本人学生とで進めます。その過程で、読む・聞く（見る）のインプットと話す・書くのアウトプットが組み込まれています。詳細な予定は下記の通りです。

第 1 回 授業概要説明
第 2 回 留学生がこの回から参加／グループ分け／アイスブレイキング
第 3 回 ディスカッションの練習
第 4 回 課題 1 トピックの検討
第 5 回 課題 1 グループで工程表作成
第 6 回 課題 1 発表資料作成 1
第 7 回 課題 1 発表資料作成 2
第 8 回 課題 1 発表
第 9 回 課題 1 結果発表／フィードバック／グループ替え
第 10 回 課題 2 ケースメソッドの課題発表
第 11 回 課題 2 グループ作業
第 12 回 課題 2 グループ作業
第 13 回 課題 2 仮発表／フィードバック
第 14 回 課題 2 発表
第 15 回 課題 2 まとめ

成績評価の基準と方法　Grading System

1）前半（最大 30 点、最低 15 点）と後半（最大 40 点、最低 15 点）の 2 回の発表の点数。
2）グループ内での貢献度 30 点（最高 3 点×授業 10 回）
3）出席 15 点

■授業の取組・工夫等について

１．授業の目的・内容について

【目的】 本授業の目的は留学生と日本人学生の協同作業を通し、1) アカデミック・プレゼンテーションのスキルを学び、2) 異文化への耐性を鍛えることの二点です。これらの目的と並行してヒドゥン・カリキュラムを設定し、教室外で留学生と日本人学生が集まらざるを得ない環境を作りだし授業終了後も学生の交流が続くための足場作りを目指しています。

【内容】 授業を前半と後半に分け、それぞれの課題についてのプレゼンテーションを行います。課題は前半が賛成／反対の立場に立脚するもので、後半がプロジェクト型学習（PBL : Project-Based Learning）で実際にアイディアを考える課題です。これらの課題について留学生と日本人 5 名でグループを構成し、グループとしてのプレゼンテーションを作り上げます。今期の課題は、前半が「学生 X は大学卒業後どちらに進むべきか」というトピックのもと、下記の選択肢二つからどちらかを決めその理由付けについてプレゼンテーションしてもらいました。

選択肢 A：やりたい仕事。NGO に勤務しフィリピンでの植林事業に従事する仕事。
年収 6000 ドル。
選択肢 B：あまりやりたくない仕事。銀行一般職。勤務地は東京。年収 210 万円。

A と B のどちらかに決めるためには、日本の企業・就職事情、NGO のこと、海外での働き方、各国の収入、治安などを調べる必要があります。この過程を留学生と日本人学生の協同学習で取り組めるように前半の授業は構築してあります。

後半は、学外機関との連携授業を行いました。今期は公益財団法人）札幌国際プラザ（以下、国際プラザ）との連携が実現し、実際に札幌市で開催するイベントを本授業の履修学生が提案するという流れで実施しました。この過程で先行事例における問題点の洗い出し、限られた予算でイベントを企画することの難しさだけでなく、学外の社会人の方との接し方も学びました。学生が提案した企画の中で実際に採用されたのは「Food Culture Festival 世界の料理と文化をつまみ食い！」というもので、2018 年 2 月 18 日に札幌市内で開催され、たくさんの市民の方にご来場いただきました（右の写真参照）。ちなみにこの事業へ出店協力してくださった 6 つの札幌市内のレストランとの交渉も本授業の履修学生が自主的に行いました。

*国際プラザによる事業報告書
http://www.plaza-cms.net/files/seminar/453/seminar20180218.pdf

２．授業運営における工夫

インストラクショナルデザインの考え方を参考にしつつ、学生と教員、学生同士の持続的な関係構築を目指して授業を組み立てています。特に注意しているのは次の点です。

①学生の名前を覚える：初回授業で学生にグループで自己紹介をしてもらいます。次いで、クラス全体に自分のグループのメンバーを紹介してもらいます。だいたいニックネームで紹介するので、教員はそのニックネームで呼んで良いかを学生に確認し、一週間で全員の名前を覚えて、以後必ず名前で呼ぶようにして授業への参加度を高めてもらいます。
②手書きのコメントシートを活用する：授業が終わる前の 5 分程度で授業へのコメント、質問を書いてもらい、教員は次週にコメントを返すやりとりを続けて学生の理解度、困難点、考えていることなどを把握するようにしています。

③リアリティのある課題を設定する：学外機関との連携は本授業開講時から行っていますが、連携をお願いする際に必ず了承していただくのが、「学生が提案したアイディアを実現してもらう」ということです。自分たちが出したアイディアが実際に社会で実現するというのは学生のやる気を非常に高めるようです。
④学び合うしかけを作る：留学生と日本人学生の持続的な交流を促進するため、本授業では配布するプリントを班で１部にすることがあります。これにより、学生同士の教え合いが起こります。教え合うことで自分が持っている情報の理解度も増します。
⑤衝突を起こす：課題が発表されてからプレゼンテーションを行う日までを意図的に短くします。具体的には授業２回分ぐらいを引いた日程で組みます。このことで、グループ作業がうまく進まなくなり、学生はいらいらし、頻繁に衝突が起こるようになります。この衝突を経験した上で、どのように課題を遂行するかを体験してもらっています。衝突が起きた際の支援のタイミング・方法は現在検証しています。
⑥教室外で集まる必要性を作る：上記⑤とも関連しますが、本授業では教室内では終わらない業務量が発生するので、必然的に教室外で集まる必要性が出てきます。その呼び水として、課題を出してから２回目の授業を強制的に教室外で活動しなくてはいけない回としています。これにより教室の外で集まることのきっかけが出来、その後の足場作りとなっているようです。

３．授業改善の参考となる事項

授業のリフレクションとして授業終了後の教室にて、うまく出来たことと改善が必要なことについてそれぞれ３つずつ書き出し、次回の授業でどのような対応策を取るかのリフレクションシートを書くようにしています。重要なことは授業が終わってすぐに書くことだと考えています。研究室に戻ってからだと記憶が曖昧になったり自分に都合の良い解釈になったりするからです。後は、半期に一度ぐらいを目処に自分の授業をビデオで録画して見返すようにしています。

４．結び

本授業履修者の日本人学生の大半が海外留学や海外インターンへと赴きます。また、授業終了後も留学生との交流が肩の力が抜けた自然な形で続いているのを目にすると授業担当者として非常に嬉しく思います。今学期の学生らも 2017 年冬にミャンマーで、2018 年春にはインドで集合したとの報告を受けています。引き続き、プレゼンテーションのスキル習得だけに留まらない本学学生の意識変容に寄与できる授業作りに努めていきたいと思います。最後になりますが、連携授業に快く協力してくださる機関のみなさま、いつも教員の無理難題に期待以上のクオリティで応えてくれる学生にもこの場を借りて御礼申し上げます。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・短期間で多くの作業を、授業時間外でもこなさないといけない状況は、自分にとっては今後、必ず役に立ち、生きてくるという実感がありました。また、授業内だけの関係ではなく、グループの留学生たちと繋がれた点も嬉しかったです。
・留学生と本当に沢山お話ができ、よい刺激をもらえた。プレゼン、そしてコミュニケーションについて学ぶことができた。今まで経験したことのない刺激を得ることができた。
・プレゼンテーションスキルについて学べただけではなく、人生や人間かんけい、社会のことも学ぶことができました。
・この授業は先生が一方的に知識を教えるだけでなく、学生に能動的に自分の意見を出すことが要求されます。この授業を通して、異文化交流・多文化共生についてより深く理解することができます。非常にいい授業だと思います。

・ひんぱんに日本人と作業ができてよかったです。
・ｓｔｅｒｅｏ　ｔｙｐｅを自然な交流でぶつかる。・先生の個人的な魅力が素晴しい。（本音～）やはり、人は人の姿に感動する。先生の体験で視野を広げられた。
・多様な背景を持った学生たちと話せること。
・いろいろな人たちとグループワークできた。自分の能力を試めしてみることができた。自分の限界が知って、もっと頑張ることができた。
・Group work, Communication with other people, presentation skill

健康と社会

「高齢者と健康」

国際連携機構　教授　結城　美智子

■シラバス

授業の目標　Course Objectives

世界に類をみないわが国の長寿社会における今日的健康課題について取り上げる。老いを生きるということについての高齢者の身体的側面，心理・精神的側面，社会的側面の特徴を理解するとともに，老年期の発達課題や死生観の理解を深める。また，高齢者と関連の深い病気である認知症等に関してその病態を知り，病態に即した対応方法やコミュニケーション方法、日常生活援助方法について知識を得る。さらに，災害と高齢者の健康との関連について学ぶ。

到達目標　Course Goals

1.高齢者の身体的側面・心理社会的側面の特徴を説明できる。
2.認知症を来す疾患の種類・症状を脳機能との関係から説明できる。
3.様々な認知症への対応方法を説明できる。
4.認知症である高齢者のコミュニケーションの特徴に関する主な点を説明できる。
5.認知症である高齢者へのコミュニケーション方法を自分なりに考え述べることができる。
6.災害と高齢者の健康との関連について自分の考えを述べることができる。

授業計画　Course Schedule

1.高齢者の身体的側面・心理社会的側面の特徴
2.高齢者の健康と生活
3.脳のしくみと認知機能
4.様々な認知機能障害（１）：言語・認知の障害
5.様々な認知機能症が（２）：動作・行為・記憶の障害
6.認知症を来す疾患の基礎知識
7.認知機能低下と認知症への対応
8.自らの体験を通して学ぶ、高齢者とのコミュニケーション
9.身体的、精神的、社会的側面から検討する高齢者とのコミュニケーション
10.医療や福祉の現場において活用されている認知症である高齢者を対象としたコミュニケーションスキル
11.事例検討を通して考える認知症である高齢者とのコミュニケーション
12.認知症である高齢者と円滑なコミュニケーションをとる方法
13.災害発生時の高齢者の健康課題
14.災害からの復旧復興期における高齢者の健康課題
15.災害援助者の健康

成績評価の基準と方法　Grading System

授業回数の７割以上出席した者について、積極的な学習態度（出席状況を含む）(25%)、各担当教員の課題レポート（75%）によって行う。
それぞれの項目により到達目標の達成度を評価する。なお、「A+」は履修者数の上位 5%以内を目安とする。

■授業の取組・工夫等について

１．授業の目的・内容

本科目は、“老い”を生きるということについて高齢者の身体的側面、心理・社会的側面の特徴を理解するとともに、世界に類を見ないわが国の長寿社会における今日的健康課題の理解を深めることを目的としています。人は歳を重ねて高齢者になります。高齢者を目の前にする時、高齢者としての存在を受け入れますが、高齢者で生まれてきた人はいません。誰もが赤ちゃんで生まれて、成長し、時間とともに生活習慣や価値観等ができて、その人らしさを発揮するようになります。高齢者は年齢で区分されるだけでなく、長い人生を生き抜いてきた個別性の高い存在であることを理解することは重要です。本科目では、老いと関連する重要な健康問題の一つとして“認知症”を取り上げています。認知症とはどのような病態か、なぜ認知症になるのか、認知症でどのようなことが障害されるかについて医学的な基礎知識を学び、さらに認知症の高齢者との円滑なコミュニケーションを体験的に学びます。また、近年増加している災害と高齢者の健康問題との関連に着目し、具体的な対策や災害による健康被害を低減するための方策について検討する授業内容としております。

２．授業実施上の取組み・工夫

学生が高齢者について、将来の自分自身の高齢者像をイメージしたり、家族や地域の身近な問題として、そして社会全体に関心をもって考えられるように取り組みました。授業の工夫点は以下の 3 点です。

１）授業の導入部分

クイズや質問などで関心を高める動機付けをおこないました。講義中心の授業では学生の関心や集中力は低下しやすいので、導入の部分において学生が自身のこととして、あるいは身近な場面を想定して考え、発表しあう時間は楽しい学習状況であったように思います。

２）授業形態・教材の工夫

教員からの一方的な話になりがちな講義形式だけでなく、少人数のグループでディスカッションしたり、全体で意見交換をおこなう方式をとり入れました。グループ編成では、類似した学部毎にして異なる学年が一緒にディスカッションできるようにしたところ、学部の特徴がでていて学生の示す反応も興味深かったと思います。また、医学的画像や教員が体験した災害時の実際の画像等を提供することで理解を深めることに役立ったと思います。

３）授業に対するフィードバック

都度、授業終了時に小さな用紙を配布し、授業の率直な感想や質問、改善点等を記載してもらい、次回の授業に反映させました。授業で伝えたかった重要なことが感想として述べられていると安堵するとともに、多方面から感想を述べる学生の感性の豊かさが伝わってきました。

また、授業中には意見を述べなかった学生もこの用紙には率直な疑問や質問を書いてくれました。

３．その他

本科目は、3 人の教員（筆者、大槻美佳准教授、宮島直子准教授）がオムニバスで構成しています。授業アンケート結果から、担当教員それぞれが求めたレポートは分量が多く、負担であるという意見がありました。今後は課題について調整したいと考えております。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・知らないコトを知れた。
・オムニバスだったので多くの分野について詳細に学ぶことができた。
・様々な視点でテーマについて説明を受けたこと。
・災害時の被災者に対する実践的な方法を学ぶことができた点。
・体験談等の具体例や映像を交えていて、イメージをつかみやすい授業でした。又、授業の直前にも資料が追加されたりなど、時事的な内容にも触れられている点も良かったと

思います。
・パワーポイントが見やすく作られていて、とても見やすかったです。事例も含め、分かりやすく授業を進めて頂き、無理なく授業を受けることができました。ありがとうございました。
・認知症について深く学ぶことができた。

歴史の視座

「北海道大学の歴史」

教育研究院　准教授　近藤　健一郎

■シラバス

授業の目標　Course Objectives

私たちが学んでいる北海道大学の足跡を札幌農学校時代から現代まで通史的に辿り、さらに各自が関心をもつテーマについて調査し理解を深める。自らを歴史的な時間の流れのなかで捉えることを通じて、歴史学的手法を学ぶとともに、北海道大学での学習や生活への意欲形成の一助としたい。

到達目標　Course Goals

１）『北大の１２５年』をテキストとして、北海道大学のこれまでと今を学ぶとともに、これからについても考える。また関心を有するテーマについて調査し発表することで理解を深める。それらを通じて、以下のような学習方法、思考方法を修得する。

２）北海道大学がこれまで行ってきた『北大百年史』等の大学史編纂があることを知り、それらから学ぶことが多いことを理解する。その際、これまでの大学史が引用してきた史料などを読み、研究成果を学ぶとともに、未解明の論点も多いことを理解する。

３）自らが体験してきたことや、実際に施設や史料などを見ることを導入として、現在を歴史的現在としてとらえられるようにする。当然のことのように感じていることも実は歴史的に形成されてきていることであること、北海道大学の歴史は広く政治、経済、社会、科学等の動きと連動していることを理解する。

授業計画　Course Schedule

第１回　ガイダンス①（授業のねらいと進め方、履修者調整など）

第２回　ガイダンス②（演習を始める前に、履修者自己紹介、授業に関連する基本文献の紹介など）

第３回～第１５回　１３回分の授業は以下のような内容である。＜講義と討議＞の中間に、＜施設見学等＞と＜各自の調査発表＞を組み込む予定であるが、具体的な展開順序および回数は受講者数を考慮しながらガイダンス②においてお知らせする。

＜講義と討議７回予定＞札幌農学校から現在までの通史的な学習を行なう。この学習においては、『北大の１２５年』（北海道大学１２５年史編集室編、２００１年）をテキストとし、担当教員がテキストを理解するために行なう講義ののち、テキストと講義の内容に関して討議を行なう。受講者全員が１回（以上）討議の際の最初に発言する役割を担うこととする。

＜施設等見学２回＞①北大内にあるさまざまな碑や建築物等を各自が撮影し、その写真をもとにキャンパス内を見学し、碑等をきっかけに北海道大学の歴史を学ぶ。②大学文書館が所蔵する史料を実際に閲覧し、歴史叙述の背後にある史料とその収集・保存について学ぶ。

＜各自の調査発表４回予定＞通史的な学習と並行して、各自の関心をもとに課題を設定し、それに関して調査し、調査発表を行なう。調査過程では、教員が文献や調べ方などについてアドバイスする。受講者数に応じて、回数を加減する。

成績評価の基準と方法　Grading System

①通史的な学習における討議への参加と事後のまとめレポート。３０％

②各自が設定した課題に関する調査と発表、および他の受講者の発表に関する議論への参加。７０％

なお、論文指導という演習形式の授業科目であるから、出席することは当然のことである。

■授業の取組・工夫等について

この授業を通じて伝えたいことは、歴史を自分とはかかわりのない他人事としてではなく、自分のこととしてとらえてほしいということにある。学生のいない「大学」は、すでに大学でないように、北大生である自分自身はこの北海道大学に欠かせないものである。そして、北海道大学とその歴史は、広く政治、経済、社会、科学等の動きと連動している。そのようなことを感じ、理解できるような授業をしたいと考え、本科目では以下の３つのことを内容として授業を展開している。授業実施上の取り組みとあわせて述べていく。

１、北海道大学の歴史の通史的な学習

『北大の 125 年』（北海道大学、2001 年）をテキストとして、札幌農学校から現在までを通史的にたどった。受講者にはテキスト 1 章分を事前に読んでおくことを課した。授業ではまず近藤が 30 分程度の講義を行ない、それに引き続き、その回の担当学生（各回 2～3 名）がテキストと講義にかかわって、理解したこと、疑問に思ったこと、議論したいことなどを口頭で発表し、その後全員で担当学生の疑問を中心に議論し、理解を深めた。

近藤による講義は、対象時期の北大の組織などの基礎事項にとどまらず、北大への入学など学生に関する歴史を意識的に取り上げた。また『文武会雑誌』など、北大で閲覧可能な史資料に言及し、可能ならばその現物を見せるようにした。学習意欲の喚起を意図してのことである。なお、各回の担当学生には、その回の授業内容から理解したこと、今後の課題などを、レポート用紙 1～2 枚程度にまとめることを課した。

２、施設見学

北大史に関する史料を収集整理し、さらに展示をしている、北海道大学大学文書館の見学を行なった。その見学においては、大学文書館の井上が、北大史に関する史資料として同館が収集している多様な史料群について解説するとともに、その実物を見せている。歴史研究で用いる史料は文字史料であると考えている学生が多いなかにあって、北大史に関する史料として、キャンパスを描いた絵画、建物の設計図、学生帽などの実物、学生が書き残したノート、さらには関係者の手紙や写真なども収集されていること、それらに基づきながら北大の歴史が研究されていることは、受講者に知ってほしいことである。この内容は、北大史への関心を高めるという点において、とくに大切なものである。

３、各自の関心に基づく調査ならびに発表

受講者がそれぞれの関心に応じて調査課題を設定し、種々の調査を行ない、それを所定の時間（今年度は 7～8 分）で発表した。例年、自らの属するサークル・部活、学部・学科等、また北大に関する著名人などの調査発表は多いが、そのほかにも今年度では士幌小屋、北大内のクラーク像、北大への留学生の入学方法などの発表がなされた。この調査過程において、前述の大学文書館の見学、そこでの学習が活きていると感じている。

この発表では、短いながら質疑の時間も取り、受講者同士の議論ができるように配慮している。なお、質疑やコメントペーパーによる感想などもふまえて加筆修正を行ない、発表者に期末レポートとしての提出を課している。

以上のように授業を展開しているが、担当者としては、丁寧に授業に臨んでいることはあったとしても、特段優れた取り組み、工夫をしているとは考えていない。もし受講者が本科目に対して高い評価をしてくれているとするならば、それは学習した学生自身の努力に対する自己評価といえるものである。

最終回の授業では、配布プリントの末尾に「授業を終えるにあたって」として、次の３点を記し、最後に講じてむすびとした。これは、授業で常に意識していたことである。それゆえ、ここでも、それを結びに用いたい。「ごく日常の風景、ありようも、歴史的に形成された現在である。／根拠をもって考えよう。／北大での残り２～５年が充実した日々となりますように。」

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・授業の後半は自由度が高く、関心のある文献を沢山読み込むことができてとても面白かった。それで単位もくると考えると一石二鳥である。

・楽しく学べること。
・テーマを決め、情報源を見極め、調査をしていくことを学べた。
・教科書を読み進めていくのは導入として良かったと思う。
・学生全員の意見をディスカッションの際に聞くことができた点。
・北大について考えることができた。

統計学

経済学研究院　教授　高木　真吾

■シラバス

授業の目標　Course Objectives

統計学は、データをどのように分析し、それに基づいてどのような判断をくだしたらよいかを論ずる学問であり、あらゆる実証研究に関わる人の方法的基礎となっている。実社会においても、統計的なものの考え方や統計手法の必要性は非常に高まっている。しかし、統計学は数学の一部という先入観からか、統計学の学習を敬遠する人が少なくない。本講義は、統計的なものの考え方や統計手法の適切な使用法の基礎を受講者が身に付けることを目標とする。

到達目標　Course Goals

統計的なものの考え方を理解し、統計データ解析のための基礎的な手法を習得する。具体的に以下を到達目標とする。

１．記述統計の基礎：統計データは数字の集まりであり，そのまま眺めていても全体の傾向は見えてこないが，平均値，グラフ化などの統計処理を行うことにより，データの特徴を把握することができる。統計データの記述・整理の方法の基礎を習得する。

２．確率変数と確率分布：統計的推測においては、統計データの発生メカニズムに対して、様々な統計モデルを仮定する。統計モデルを定式化にするために必要不可欠である確率変数と確率分布の基礎を理解する。

３．推測統計の基礎：統計的推測とは、サンプルデータに基づいて母集団分布に関する推測を行うことである。統計的推測には、母集団分布の特性値を推定するための方法（統計的推定法）と母集団分布に関する仮説を検証するための方法（統計的検定法）がある。特に、母集団分布として正規分布と二項分布を仮定した場合における統計的推定法の基礎を習得する。

授業計画　Course Schedule

１．ガイダンス
２．データの整理と記述（データの全体像）
３．データの整理と記述（データの特性値）
４．確率の基礎
５．確率変数と確率分布の基礎
７．多次元確率分布
８．代表的な確率分布
９．母集団と標本
１０．正規母集団からの標本
１１．点推定と区間推定
１２．仮説検定（母集団平均に関する検定）
１３．仮説検定（母集団平均の差に関する検定）
１４．仮説検定（カイ二乗検定）

加えて，適切な時期に中間試験と期末試験を実施する.

成績評価の基準と方法　Grading System

成績評価は以下の基準で行います。
・学期末試験 70 点
・中間試験 30 点
の合計点に基づいて，次のように評価します。
A＋：95－100，A：90－94，A－：85－89，B＋：80－84，B：75－79，

B－：70－74，C+：65－69，C：60－64，D：50－59，D－：0－49，
F：学修成果を示す評点無し

■授業の取組・工夫等について

①授業の目的・内容

統計学は，自然科学分野における効率的な実験計画および実験結果の合理的解釈，人文社会科学分野に典型的な観察データからの適切な統計的推測，あるいは，多くの局面で必要となるデータに基づく意思決定，これらを支える方法的基礎となっています．実社会におけるデータ情報活用の重要性が認識されるにつれ，統計学的なものの考え方や統計手法を実践する必要性は非常に高まってきており，本講義はその基礎を身に付けることを目的としています．統計学では，全担当教員で，講義内容をデータの整理を中心とする記述統計，母数の推定・検定に関する推測統計の入門的な内容という形で統一しています．

②授業実施上の取組・工夫

講義では，従来の講義アンケートの結果を踏まえ，練習問題・例題を多くすることを心掛けています．全学教育科目の主たる受講生は，大学受験からまだ日が経っていないことが多く，問題を解くことで理解を定着させるという方法を好む学生が多いと理解しています．そのため，母集団と標本，信頼区間，有意水準など統計学特有の概念の理解とその定着を図るため，繰り返し，時にはくどいと言われるくらい，講義内での練習問題・復習と確認のための基礎的な宿題問題を解いてもらっています．

また，全学教育科目の統計学では，数学的に高校の範囲を超えるようなものは必要としませんが，学部間・個人間の数学習熟度の差を考慮して，数学的な証明・練習問題は，講義内での説明は最小限にとどめ，講義資料の補足として講義用ウェブサイトに掲載しています．数学的な展開に興味がある学生，何とか数学的な方法論も理解したいと考えている学生には補助的な資料で対応できるようにしています．（統計学検定１級に対応する程度の）発展的な問題も解答付きで講義用スライドには掲載し，自習用にウェブサイトに掲載していますが，これらについて質問を受けたことはほとんどないことから，そこまで学習する受講生は少なかったかな，と理解しています．

③その他

学生からの質問等の連絡は，可能な限り即座に返信するようにしています．直接教室などで質問がある場合には，その場で対応できますが，メールでは一度先送りすると，ほぼ間違いなく返信を忘れてしまいます．教員の立場から，一対多だから，と考えたとしても，学生側も勇気をもって教員に連絡してくれているので，なるべく早くリクエストに答えようと心がけています．

私が担当する全学教育科目の統計学は，毎年少しずつ講義資料を書き換え，練習問題を増やしていますが，学期末試験の理解度・習熟度を見る限り，授業日程や全学教育科目の試験日程にかなり左右されるように感じます．試験で良い成績を取ってくれることはそれ自身望ましいことですが，試験前に詰め込むことだけで対応しようという動機づけにならないよう，基礎概念の理解と練習問題をなるべく解いてもらうことで，普段の学習・普段の宿題の延長線上で学期末試験を迎えてもらうよう日常の学習の動機付けとなる教材・講義を提供することを今後も心掛けていきます．

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・説明も何もかも丁寧にしてくださる先生だった点。
・課題の量・内容が丁度良かった。
・先生の対応がていねいで、課題が適切だった。
・プリント。

・分かりやすかった。プリント、スライド等。
・説明が迚も叮嚀で理解し易かった。
・質問対応の速さ、丁寧さに感動でした。

英語Ⅳ

メディア・コミュニケーション研究院　助教　張　ジュヒョク

■シラバス

授業の目標　Course Objectives

グローバル化に積極的に対応し、高い「言語能力」を身につけることも勿論大事であるが、「異文化に臨む姿勢」を正しく学ぶことも重要である。文化というのは、基本的に優劣を決めることのできない相対的なものである。このような文化の相対性に関する認識が足りないと、母国の文化を基準に他国の文化を評価してしまうミスを犯しかねない。

従って本授業では、英文の読解力及び速読力を身につけると同時に、異文化に臨む際の正しい姿勢を理解することを目標とする。

到達目標　Course Goals

・英語長文を速読で読みこなし、全体の内容を把握する読解力を身につける。
・文化の多様性及び相対性を理解する。

授業計画　Course Schedule

・速読による内容把握能力の向上
毎回の授業では、決められた時間に指定箇所を読みこなし、議論を行う。
各章を１回または２回の授業で学習していく。

・小テスト
読解の課題に対する理解度を確認するための小テストを、毎回の授業の最初に行う。

・期末テスト
文化の多様性に関する英文を速読し、理解した内容を元に問題に解答する。

成績評価の基準と方法　Grading System

(1)毎回の授業における議論への貢献度(積極性・発言内容など)
(2)小テスト(最も成績の良い 10 回分のみ反映)
(3)期末テスト
それぞれの評価の比率は(1)＝30%、(2)＝30%、(3)＝40%とする。

■授業の取組・工夫等について

①授業の目的と内容

グローバル化に積極的に対応し、高い「言語能力」を身につけることも大事であるが、「異文化に臨む姿勢」を正しく学ぶことも重要である。文化というのは、基本的に優劣を決めることのできない相対的なものであるが、このような文化の相対性に関する認識が足りないと、母国の文化を基準に他国の文化を評価してしまうミスを犯しかねない。従って本授業では、英文の読解力及び速読力を身につけると同時に、異文化に臨む際の正しい姿勢を理解することを目標とした。

ボルネオ島、エチオピア、バリ島、ミャンマー、モロッコ等、世界各地を旅行した人が英語で書いた体験談をテキストとして活用し、毎回の授業にて異文化に接する度に、それを文化相対主義に基づいて理解する練習を行った。

②授業実施上の取組・工夫（例：動機付け（学習意欲増進），授業内容理解，学生参加促進，成績評価等）

(1)学生との絆を作る

写真付きの自己紹介文をメールにて提出してもらい、エクセルファイルへデータベース化して管理しつつ、全員の顔と名前を覚えるようにした。授業中学生に質問をするときも、直接名前で呼ぶようにした。1度でも多く名前を呼び顔を合わせたいと思い、出席確認システムを使わず毎回の授業にて必ず出席確認を行った。これは、学生に自分がただの匿名の1人ではないという認識を与え、授業へ積極的な参加を誘導するための措置であった。その結果、授業中寝たり携帯電話をいじったりすることがなくなるなど、全般的な集中度が改善されたうえ、学生との深い絆も作られた。

(2)グループワーク型授業

読解の授業であったので、何よりも退屈にさせないために様々な工夫をした。その１つがグループワーク型の授業である。まず制限時間内に教科書の指定箇所を読んでもらい、該当箇所に関するクイズを出し、その解答をグループで議論してもらうような形をとった。クイズ番組のように点数をつけ、その結果を成績にも反映した。このグループワーク型の授業にはもう１つの目的があったが、それはこの授業を通じて友達を作ってもらうことであった。大学 1 年生にとって今後の大学生活を共にする友達を作るきっかけを提供することは、授業の内容以上に大事であると思ったためである。そこで、学期中 1 度グループ変更も行った。このようなグループワーク型で授業を行った結果、学生の発言頻度が高くなったうえ、学生間の絆も作られて、大変良い雰囲気で授業を進めることができた。

③その他，他の教員の授業改善の参考となる事項 等

奥地を旅行し、そこの特異な文化を紹介するような文献が少なかったため、テキスト選定に苦労した。熟考に熟考を重ねた結果テキストを選定したが、大学 1 年にとって難しい文法や語彙が多く使われており、学生が混乱する時もあった。テキストは授業に大きな影響を及ぼす要素であるため、その選定についてさらなる工夫が必要であることを実感したきっかけとなった。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・雑談も交えてとても面白い授業だった。・先生の話が面白かった。
・楽しかった！先生の外国での体験談が楽しかった。
・先生の旅行話が楽しかったです。
・異文化について学ぶことができてよかった。
・楽しく異文化について学ぶことができた。英語の語彙が増えた。
・英語だけでなく異文化理解の分野を学べて一石二鳥。
・楽しかった。
・様々な文化について学ぶことができた点。
・高校のような感覚で授業が楽しかったです。
・先生が優しかったしクラスの雰囲気がすごくよかったので楽しかった。参加型で、よかった。写真や動画でわかりやすかった。
・ジュヒョク先生だったこと。
・先生がやさしい。

ドイツ語演習

「基礎：留学生から見たドイツ」

メディア・コミュニケーション研究院　教授　ASSMANN STEPHANIE

■シラバス

授業の目標　Course Objectives
授業を終えた段階で受講者が簡単な日常会話を交わせるようになることを目標とします。また自分自身について語り、短い文章を書いたり読んだりできるようにすることも目指します。

到達目標　Course Goals
全学教育ドイツ語Ⅰに対応する聴解・発話・読解・作文能力の習得を目指します。重点は聞く・見る・話すことです。

授業計画　Course Schedule
愉快で色とりどりの写真入り物語、絵および聴解練習により、受講者にはミュンヘンにいる３人の若者の生活を疑似体験してもらいます。授業ではCDおよび配布教材も用います。

成績評価の基準と方法　Grading System
第一次試験：１５％
第二次試験：１５％
期末試験：２０％
第一次宿題：１５％
第二次宿題：１５％
授業に積極的な参加：２０％

■授業の取組・工夫等について

私はnative speakerですので、初心者のレベルでもコミュニケーションのパターンを中心にします。毎回の授業は、最初の１０分ほど、毎回順番に質問を行い、すべての学生に一度ドイツ語で話す機会を与えます。前回の授業の内容を復習しながら、すべての学生に順番で日常生活の簡単な挨拶の質問をします。

コミュニケーションのパターンは重要ですが、文法も取り上げます。必要であれば、日本語で文法を説明する場合もあります。

もう一つの工夫は、ペアワークとグループワークをできるだけ行うことです。多くの人の前で発言するよりも、小人数のグループの中で簡単なコミュニケーションのパターンを用い、学生が安心して学習できるよう心がけています。

またドイツ語圏の国の文化と日常生活を紹介するために、ドイツの出版社による教科書を利用します。必要に応じて日本語でも文法を説明します。

達成目標にも記したように、聴解・発話・読解・作文能力の習得を目指します。そのため早めにドイツ語で簡単な読解を練習し、第１の宿題と第２の宿題では、学生に６つか７つの文で文章を書かせています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・わかりやすかった。

・アスマンが優しくて可愛いくてわかりやすかったです。いつまでもそのままでいて下さい。
・ドイツ語を楽しく学べた。
・課題の出し方がとても適切でした。
・先生の発言がききとりやすかった。説明がわかりやすかった。
・とても分かりやすかったです！
・ネイティブの発音でドイツ語が聞けたこと。
・会話しながらドイツ語を学べた点。

線形代数学Ⅱ

理学研究院　准教授　澁川　陽一

■シラバス

授業の目標　Course Objectives

線形代数学Ⅰの科目内容に続いて, ベクトル空間と線形写像について基礎理論を講義する. 行列と連立１次方程式の理論を, ベクトル空間の概念を基礎とした線形写像を用いて記述する. 正方行列の固有値, 固有ベクトルについて講義する. 特に対称行列を対角化する理論および計算法を述べる.
線形写像の行列表現について述べ, 特に線形変換が表現行列の固有値, 固有ベクトルを通じて理解されることを述べる.

到達目標　Course Goals

ベクトル空間や線形写像の概念や基本的事項を理解する.
行列とベクトルによる具体的な取扱いに習熟する.
連立１次方程式の解空間を上記の立場から理解する.
行列(３次, ４次程度)の固有値, 固有ベクトルについて具体的に計算できる.

授業計画　Course Schedule

１．ベクトル空間：定義と例, 部分空間
２．線形独立と線形従属, ベクトル空間の次元と基底
３．線形写像：基底と表現行列, 基底の変換
４．線形写像の核と像と階数, 次元定理
５．行列および線形変換の固有値と固有ベクトル
６．内積空間：定義と例, ノルム, シュワルツの不等式, ３角不等式
７．空間の部分空間と直交補空間, グラム・シュミットの直交化
８．対称行列の対角化と２次形式

成績評価の基準と方法　Grading System

授業目標に対する到達度を, 次の観点から総合評価する.
(1) 科目の骨格をなす定義・定理等の基礎知識を修得しているか.
(2) 典型的な具体例について計算・構成等を適切に遂行できるか.
(3) 基本概念や定理に基づいた論証を正しく行うことができるか.
(4) 科目の中心的な考え方を修得し, 全体にわたり内容を有機的に理解しているか.
(5) 種々の問題を解決する際に科目内容を活用できるか.

成績評価の方法としては, 試験の成績および履修状況を総合評価する.

■授業の取組・工夫等について

今回エクセレント・ティーチャーズに選出されましたこと, 大変光栄に思っております. 前回, 平成２２年度に選出された際にも「線形代数学 II」の授業を実施するにあたっての取組・工夫などについて報告致しました. その後, 全学教育科目では「微分積分学Ⅰ, II」を受け持つようになり「線形代数学 II」から離れていたのですが, 平成２８年度から「線形代数学Ⅰ」, 平成２９年度から「線形代数学 II」の授業を再び担当するようになりました. 平成２２年度までの授業実施上の取組の中から良いと思われるものを踏襲しつつ, また新たな工夫を加えて取り組みました.

① 授業の目的・内容

本授業では，線形代数学 I の科目内容に続いて，ベクトル空間と線形写像に関する基礎理論を講義しています．直交行列を用いて 3 次・4 次程度の実対称行列を対角化できるようになることが主目標の一つです．このため，一次独立・一次従属，基底，行列の固有値・固有ベクトル，シュミットの直交化などを扱います．

②授業実施上の取組・工夫

線形代数学 I に比べると線形代数学 II の授業内容は抽象度が高くなっており，これが学生の理解を難しくしています．この点をいかに乗り越えてもらうかが工夫のしどころだと個人的には感じています．そのため，授業ではなるだけ具体例を利用した説明をするよう試みています．命題の証明なども含めて例で理解してもらうことを心がけています．

その他の取組を以下に紹介致します．

１．授業内容の定着を図るため，授業開始前に前回の授業内容に関する簡単な小テストを行っています．小テストの際，教科書を見ることは許可しませんがノートを見ることは許可しています．解答例は ELMS（北大教育情報システム）内の Moodle を利用して配布し，原則として次回の授業で採点済の解答を返却しています．これを通じ学生に適度な復習を促しています．

２．毎回の授業で，必ず具体的な例題を扱うようにしています．授業内容の理解を図ることが主目的ですが，時間の許す範囲内で学生に解答を発表してもらうためでもあります．講義中心の授業ですが，このようにして授業への積極的な参加を促しています．

３．多くの項目を用いて成績評価をしています．中間・期末の定期テストだけではなく，上で紹介した小テストや授業外学習の程度を把握するためのレポート，ELMS 内の Moodle を利用して出題した問題への解答など，多岐にわたります．私が学生の頃，定期試験だけでの成績評価になじめなかったこともあり，このような形にしています．なお，風邪などによる欠席にも対応するため，小テスト（全１１回）は成績の良い８回分を成績評価に使用しています．

４．学生の集中力の持続を狙って，最初は板書，途中でプロジェクターを利用し，最後に例題などを扱うため再び板書に戻るという授業構成にしています．

③その他，他の教員の授業改善の参考となる事項

私が線形代数学の授業担当から離れている間に高校では行列を扱わなくなり，現在では，行列を全く知らない学生に全学教育で「線形代数学 I，II」の授業内容を講義することになりました．この点が以前「線形代数学 II」を担当していたときとの大きな違いです．高校で行列に慣れているのといないのとでは，その差はやはり大きいと感じています．そこで，授業内容と学生との距離を少しでも縮めるため，初回の授業の際に「座標軸の話」や「測定器の話」など，本年度から独自に用意した教科書（プリントです）に記載した例え話を用いて，半期の授業内容を簡単に紹介するようにしています．

また，授業では「一次独立・一次従属」，「基底」などの専門用語をどうしても使用します．学生がスムーズに授業へ取り組めるよう，専門用語を問う穴埋め問題を ELMS 内の Moodle を利用して出題しています．

■学生の自由意見（良かったと思う点）

・理解がとても深まる、工夫がこらされた授業でした。独自教科書、小テストなどが特に良かったです。
・教科書の内容はかなりレベルが高く、授業で扱う内容は非常に平易でテストも難問奇問はない。なのでいろいろなレベルの生徒がそれぞれが望むレベルまで学習を選べるので良いと感じた。

・小テストがあることで前の授業の復習をしなければいけないので、良かったと思う。
・わかりやすい説明。
・スライドが適切に使われていて分かりやすかったです。
・分かりやすかった。・小テストが毎回あって復習になった。
・線形Ⅱは難しいときいていたが先生の教え方が分かりやすくよかった。
・毎授業で１問は問題演習があって、具体的なイメージがしやすかった。
・テキスト以外の補足のプリントが役に立った。
・板書の内容を口答でほそくしていたところ。スライドでの補足。教科書以外の内容も少し扱ってくれていたところ。
・成績のつけ方の基準がはっきりと決まっていてやりやすかった。テスト一本で成績をつけるのではなく小テストも良かったものから何個と、緒事情で授業に出られなくとも、日々の勉強をしっかりしていれば救済してもらえるシステムだった。また授業の説明も大変分かりやすく、一般例と具体例どちらも使っていて比較的容易に理解することができた。
・抽象的で難しい内容だという評判のある線形代数学Ⅱであったが、分かりやすい説明のおかげで、そこまで苦にならず授業や学習に取り組めたと思う。小テストが、良かった数回のみをカウントするという方式で、とても画期的と感じた。全てを加算すると、それが重荷になり、１度風邪を引いたりして欠席すると、その後のやる気をなくしてしまうことがあるので、この方式は他の授業でも取り入れてほしいと感じた。
・抽象的な話が少なく、実際の数値を用いた具体的な話が多かったので、イメージがしやすく学習がスムーズに行えた。
・様々な数学的手法を、手順を番号付けして教えていた点。